



市民活動との連携を！

廃棄物学会会長 高月 紘

明けましておめでとうございます。

昨年から今年にかけて各地区に支部が設立されたこともあり、今年は廃棄物学会にとって各支部の活動が活発化し、地域に密着した活動が行われる年と思われます。とりわけ、地域での市民活動と連携した学会活動に期待したいと思います。廃棄物学会は、他学会にはあまり例のない登録団体市民会員（以下、市民会員）という制度を設け、幅広く一般市民、消費者の学会への参加を呼びかけている特色ある学会であります。

このことは当学会が設立当初から廃棄物問題、ごみ問題は市民生活に直結した問題であり、市民・消費者の理解がないと解決できないという認識の下で活動しようと考えているからです。

言うまでもありませんが、環境問題の解決には市民、行政、事業者（企業）のパートナーシップが不可欠です。パートナーシップが実のあるものになるためには、お互いの信頼関係が確立されなければなりません、

そのためには、まず情報の共有化が重要なポイントであります。その意味で、当廃棄物学会を各セクターの情報交換の場として大いに活用していただければと思っております。

市民会員は、現状では学会の構成員比率で見るとまだまだ低いのですが、学会に入れば廃棄物に関する最新の情報、幅広い情報（海外情報なども）、科学的なものの見方などを得ることができますし、何よりも種々の専門家、研究者とのネットワークができるメリットがあります。

一方、研究者側にとっても、市民の活動家と情報交換することによって、日頃インターネット等から得られるバーチャルな情報でなく、現場の生きた情報から本当の問題点が見えるなど廃棄物問題の解決のための考察を深めることができます。

幸い、先に述べたように各地域に支部が設立され、より身近に当学会活動に参加する機会が増え、学会費も市民会員については大幅に値下げされ入会しやすくなりました。

また、当学会は「C & G」という市民向けの学会誌を発行していますが、この「C & G」はごみ問題に関する有益な情報が満載されており、かつごみを通しての市民活動の情報交換誌としての役割をもっているユニークな市民ごみ読本です。

さらに、当会内には、消費者・市民部会という調査研究グループがあり、市民の目線で活動している場もあります。

会員の皆さん、是非この機会にごみ問題で市民活動をしている方々に声をかけ、登録団体市民会員制度を利用し、市民会員として学会へ入会するようお誘い下さい。



パートナーシップには情報の共有化が不可欠です。

平成14年11月28日～11月30日

京都市にて盛大に開催される

ポスター発表は、昨年と同様に2日に分けて行い、ポスターは2日間とも掲示する方法をとった。発表会場がやや狭いとの声も聞かれたが、各ポスターには赤、緑の色紙で発表日が分かり易く示されており、実行委

	会 員	学 生	非会員	国際S	合計
事前受付	324	31	25	0	380
当日受付	749	106	158	3	1,016
合 計	1,073	137	183	3	1,396

講演番号	表題・受賞者
A1-12	ごみ中の揮発性塩素の経年変化とその由来の検討 東京都環境科学研究所 及川 智、占部武生
A9-7	人工衛星とGISを用いた不法投棄監視システム (独)国立環境研究所 田崎智宏、田村正行、大迫政浩
B5-6	使用済みプラスチックの高度乾式分離技術 NKK 宮澤智裕、山崎茂樹、清水 浩
B8-14	ごみ焼却灰のセメント原料化(その2 原料化施設の整備と稼働状況) (株)トクヤマ 城 安市 山口エコテック(株) 羽矢安秀 山口県 重田道正
C5-6	排ガス処理過程における DXN の挙動と未燃炭素の関係～DXN 生成の経時変化に関する研究～ 東京都 古角雅行 (株)クボタ 釜田陽介
C7-9	熱分析を用いた一般廃棄物の熱分解挙動のモデル化の検討 長岡技術科学大学 弥富洋介、姫野修司、小松俊哉
C8-7	溶融スラグ中の銅および亜鉛の結合状態 京都大学 高岡昌輝、武田信生 東京大学 山本 孝
D7-6	ヒメダカ(<i>Oryzias Latipes</i>)卵の水道水暴露における卵膜軟化現象 熊本県立大学 田中麻記子 水環境テクノセンター 高橋 徹
E3-3	高密度電気探査を利用した廃棄物由来の土壌・地下水汚染調査 (株)建設技術研究所 和田卓也 北海道大学 石井一英、古市 徹
F4-2	Analysis of PCBs and CBzs in Solid Samples by Microwave-Assisted Extraction Yifei SUN, Masaki TAKAOKA, Nobuo TAKEDA, University of Kyoto

れ、約 600 名の参加があった。

見学会は 3 コース計画されたが、土曜日の午後であること、その時間に関西支部の設立記念シンポジウム「廃棄物と土壤汚染」が開催されたことが影響してか、参加者数は 3 コース合わせて 63 名にとどまった。

2 日目夜の懇親会には約 300 名が参加した。韓国廃棄物学会の方々も参加され、両国間の交流を深めた。アトラクションとして「竹太鼓」が披露され、太鼓、竹製の打楽器などの迫力ある演奏を楽しんだ。



研究発表会の開催にあたっては、地元京都をはじめ、関西支部メンバーを中心とする実行委員会が組織され、準備、運営を担当していただいた。関西での開催は 3 度目になるが、組織の力量を改めて認識した。研究発表会開催中に関西支部の設立総会、設立記念講演も行われ、さらに活発な活動が展開されることを期待します。

次回の第 14 回研究発表会は、平成 15 年 10 月 22 日（水）～24 日（金）の 3 日間、つくば国際会議場で開催する予定となっています。多くの方々の参加をお願いいたします。

（年会委員会幹事 松藤敏彦 記）



（左）シンポジウムの様子（上）高月会長と優秀ポスター賞受賞者の皆さん

企画委員会 ■■■■ 平成14年度シンポジウム 「我が国素材産業の資源循環産業化の潮流」開催報告 平成14年11月27日

廃棄物学会シンポジウム「我が国素材産業の資源循環産業化の潮流」が 11 月 27 日幕張メッセ国際会議場においてウエステック 2002 と併催された日本廃棄物会議の中で、開催されました。

本シンポジウムは、各種素材産業が今後の循環型経済社会における資源循環にどのように関わるかを見通すことを目的として企画されたものです。素材産業からの 4 人のパネラー（JFA グループ 日本鋼管（鉄鋼）同和鉱業（非鉄）太平洋セメント（セメント）宇部興産（化学））による各社の資源循環事業の展開例と展望についての報告に引き続き、新日本製鐵もパネラーに加わり、青山企画委員長をコーディネータとしたパネルディスカッションが行われました。この中で、素材産業の資源循環産業化において技術革新が進んで対象物質が広範化しつつあること、素材産業間での連携がはじまっていることなどが多くの具体例と共に紹介されました。

最後に、循環型経済社会を構築するには従来の廃棄物処理の体系の中にこれら素材産業の取り組みや、製

品設計といった視点が入ることがますます重要となってくるとの指摘がされ、約 150 名の参加を得て、3 時間半に及んだシンポジウムは盛会裡に終了しました。

（企画委員会 木村哲雄 記）



▲ 会場風景

関西支部設立総会、記念講演、記念シンポジウム開催報告

記念シンポジウムは、「廃棄物と土壤汚染」と題し、平田教授（和歌山大）をコーディネータに、森澤教授（京都大）、山上部長（大栄環境株）、藤倉部長（（財）地球環境センター）、尾形部長（（社）土壤環境センター）、由田課長（環境省土壤環境課）を招いて行われた。廃棄物と土壤汚染にかかわるリスク管理、産業廃棄物処理処分業界での汚染土壌への取組、過去の土壤汚染対策の経緯、土壤汚染対

記念講演会で約 120 人、シンポジウムでは約 250 名の参加があり、関西支部の新たな船出にふさわしい記念行事となった。
(関西支部 山本攻 記)



▲関西支部設立記念シンポジウムの様子

【お知らせ】

その他 : 海外イベント紹介など

問合せ先：(社)水環境学会セミナー係 TEL：03-3632-5351

中央環境審議会の循環型社会計画部会において、循環型社会形成推進基本計画が検討されております。この中で、国、国民、NPO・NGO、事業者、地方公共団体が相互に連携を図りつつ、循環型社会の形成への積極的な参加と適切な役割分担の下で適性かつ公平な費用負担により各種の施策を着実に講じていく必要性を述べています。景気回復の先が見えない中ではありますが、将来の安全で住みやすい環境を確保するために、一層の努力が必要となるでしょう。

(鈴木明郎 記)

正 会 員	3,704 (237)
学生会員	322 (84)
外国人会員 (DM)	22 (3)
公益会員	115 (3)
賛助会員	210 (0)
計	4,373 (327)

注) 外国人会員(DM)は、廃棄物学会外国人等会員規程第4条に定める会員を示す。



<http://www.jswme.gr.jp>
古紙配合率 100%再生紙を使用しています